

十六年甲申春二月、安積皇子の薨する時に、
内舎人大伴宿禰家持の作る歌六首

四七五番

かけまくも あやに恐し 言はまくも ゆゆしき
かも 我が大君 皇子の命 万代に めしたまは
まし 大日本 久邇の都は うちなびく 春さり
ぬれば 山辺には 花咲きををり 川瀬には 鮎
子さ走り いや日異に 栄ゆる時に およづれの
たはこととかも 白たへに 舎人よそひて 和
東山 御輿立たして ひさかたの 天知らしぬれ
こいまるび ひづち泣けども せむすべもなし

反歌

四七六番

我が大君 天知らさむと 思はねば おほにそ見
ける 和東山

四七七番

あしひきの 山さへ光り 咲く花の 散りぬる
とき 我が大君かも